分科会Ｄ［企画］　「両岸三地」の政治：認識・政策・相互作用

企画責任者　松田康博（東京大学）

中国大陸、香港、台湾は「台湾海峡を挟んだ三つの地域（両岸三地）」と呼ばれ、それぞれが互いに相手を強く意識し、独自の政策を展開し、そして相互作用を深めてきた。本分科会では、「両岸三地」の政治がどのように展開したのかを、それぞれの当局と社会が他の 2 地域をどのように認識し、当局がどのような政策を行い、そしてその結果どのような相互作用が生まれたのかを、1997 年の香港返還以降を主な対象時期として検討する。

中国当局には、かつて返還後の香港で「一国二制度」を成功させ、台湾との統一のモデルとする考えがあった。しかし、中国当局はそうした対台湾政策とは関係なく香港の「高度な自治」の骨抜きを進めて混乱を招き、台湾住民の警戒感を高めてしまった。ますます抑圧的になる中国当局に対して香港社会は分裂を深め、台湾への移民熱の高まりさえ見られる。台湾では、香港への同情と中国への反発が強まり、統一を拒絶して自らの主体性を維持することがコンセンサスになっている。

規模も政治体制も法的地位も全く異なる「両岸三地」であるが、一地域が動くことで、他の二地域もそれに連動し、複雑な域内政治が展開されるようになっている。本分科会では、三地域からの視点を総合することで、「両岸三地」の政治的展開を多角的に検討する。